

特集 感情科学に向けて

感情研究は心の科学におけるシンデレラである (Jenkins, J. M., Oatley, K. and Stein, N. 1998)。感情は、心の問題としてきわめて魅力的で重要であるにも関わらず、これまで心理学の舞踏会に招かれてきたのは、知覚や学習、記憶、思考など、それぞれ重要ではあるが、魅力ではシンデレラにややおよばない姉達ばかりだった。となりの社会科学でも、感情は個人の内面に関わる心理学の問題として、端役にすぎなかった。しかし、21世紀も間近になって、感情研究は、生物学から社会科学まで及ぶ、心に関する学際的科学のより広い舞台に、ようやく主役として登場するようになった。

Davidson, R. J., Ekman, P., and Scherer, K. R. (2003) は、こうした感情科学の現在を、総合的に紹介したハンドブックである。「1. 神経科学」、「2. 自律神経系」、「3. 遺伝と発達」、「4. 感情の表出」、「5. 感情の認知的要因」、「6. 人格」、「7. 感情と社会過程」、「8. 感情の進化的文化的展望」、「9. 感情と精神病理」、「10. 感情と健康」の10部からなり、合計59章、約1200ページの分量である。擬人化インタフェースや感情ロボットなどの工学的問題はカバーしていないが、学際的に活発に進行中の感情研究の現在を、かなり包括的に紹介している。

本特集号は、こうした学際的に展開中の感情研究についての、心理学と社会学の現場からの報告である。「感情科学の展望 (1) — 感情と感情科学の位置について —」(雨宮俊彦) では、心の科学における感情科学の位置づけ、感情現象の多面性と用語、ストレスについての概観がなされている。「再生された自伝的記憶の内容に抑うつ気分が与える影響 — 非臨床群における検討 —」(関口理久子・竹中健二) では、抑鬱度の高いグループと低いグループに対して、自己注目度についての実験的操作をおこない、これらの要因が自伝的記憶の想起へどう影響するか実験的に検証している。「抑うつ気分が顔の表情認知に及ぼす影響」(関口理久子・吉津潤) では、感情伝達の基本となる表情の認知について、抑鬱度の高いグループと低いグループの差を実験的に検証している。「非臨床群における強迫観念と不合理な信念」(久本博行) は、大学生における強迫観念の高さと不合理な信念の強さの間の関連を質問紙調査によって検証したものである。「献身とテロリズムの感情論理 — オウム真理教事件についてのソシオンの考察 —」(木村洋二・渡邊太) では、ソシオン理論における三項モデルにもとづき、献身とテロリズムという、なまなましい社会現象を感情論理の観点から分析している。

今回の特集とハンドブックの対応を見る。雨宮では、「1. 神経科学」、「2. 自律神経系」、「10. 感情と健康」についての基本的な紹介がなされている。関口・竹中と久本では、

感情の記憶への影響ならびに不合理な信念という「5. 感情の認知的要因」が、関口・吉津では顔の表情という「4. 感情の表出」がそれぞれ扱われている。関口・竹中、関口・吉津、久本は、これらの認知や伝達と抑鬱や強迫などの「9. 感情と精神病理」および「6. 人格」に関わる要因との関連を検証したものである。木村・渡邊は、「7. 感情と社会過程」について事例を通じて分析したものである。こうして見ると、今回の特集は、「3. 遺伝と発達」、「8. 感情の進化的文化的展望」が全く欠けているが、感情研究の現在の広がりについては、膨大な研究領域のサンプルとして、ある程度までは反映できたとと言えるだろう。

本特集における心理学と社会学の現場からの報告が、今後、さらに本格的に展開するであろう、感情現象の解明への学際的研究に向けて、なんらかの参考になることがあれば幸いである。

雨宮俊彦

Davidson, R. J., Ekman, P., and Scherer, K. R. 2003. *Handbook of Affective Sciences*, Oxford University Press.

Jenkins, J. M., Oatley, K. and Stein, N. 1998. *Human Emotions: A Reader*. Blackwell.